

非動作主主語他動詞文の分析： Little *v*の素性について*

長谷川 信子
神田外語大学

1. はじめに

他動詞というのは、一般に、目的語（目的格を持つ名詞句）を持つ二項以上の動詞を指し、その観点からは、主語の意味役割が(1)のように動作主(agent)であろうと(2)のように原因(causer)や経験者(experiencer)であろうと、(1)と(2)には「同じ」他動詞が使われているとみなされる。

- (1) a. 子どもが 枝を 揺らした。
b. 花子が 枝を 折った。
c. 朋子が（「わっ」と言って）大輔を 驚かせた。
- (2) a. 風が 枝を 揺らした。 （原因）
b. 花子が 腕を 折った。 （経験者）
c. その出来事が 大輔を 驚かせた。 （原因）

しかし、異なる意味役割が同一の構造的位置を占めるように見える(1)と(2)の現象は、意味役割の文構造への表出に一定の関係を求める仮説（例えば、(3)の Uniformity of Theta Alignment Hypothesis (UTAH)）の観点からは、その妥当性に関わる問題である。

* この論文の内容は 2000 年度の神田外語大学大学院での授業、神田外語大外語大学 COE プロジェクト国際シンポジウム（2000 年 12 月 9 日）、University of Durham（2001 年 3 月 20 日）、神戸松蔭女子学院大学言語学研究会（2001 年 5 月 25 日）、筑波大学東西言語文化の類型論特別プロジェクト国際シンポジウム（2001 年 7 月 26 日）において発表し、出席者の方々から貴重なコメントをいただいた。深く感謝したい。この論文の研究は、神田外語大学への文部省科学研究費（COE 形成基礎研究費）（課題番号 08CE1001、研究リーダー：井上和子）からの援助を受けた。

(3) *Uniformity of Theta Alignment Hypothesis (UTAH)*

Identical thematic relationships between items are represented by identical structural relationships between those items at the level of D-Structure. (Baker 1988:46)

この制約は、意味役割間の相対的位置関係のみを規定するというように「緩く」解釈すれば、(1)の動作主も(2)の原因や経験者も、目的語である対象よりも構造的に上に現れる点で、共に主語位置を占めることに問題はない。しかし、(より説明力のある仮説として) (3)をより厳しく解釈し、意味役割間の相対的位置関係ではなく、各々の意味役割が特定の構造的な位置を占めることを規定する制約とみなせば、動作主、原因、経験者といった異なる意味役割が同じ位置（主語の位置）に生成されると考えるわけにはいかない。

以下では、UTAHを「厳しく」解釈する方向で、(2)に見られる非動作主他動詞を持つ文を、(1)の動作主他動詞文や対応する自動詞文との関係を含めて考察し、項構造と文構造に関わる機能範疇 *little v* の素性のあり方から新しい提案を行いたい。結果として、「外項を付与する動詞だけが目的格を付与できる」とするブルツィオの一般化について新しい見解を提示し、その一般化では捉えることのできなかつた項と格、およびそれらと文構造の関係を、本提案なら無理なく捉えられることを示す。

2. 非動作主主語について

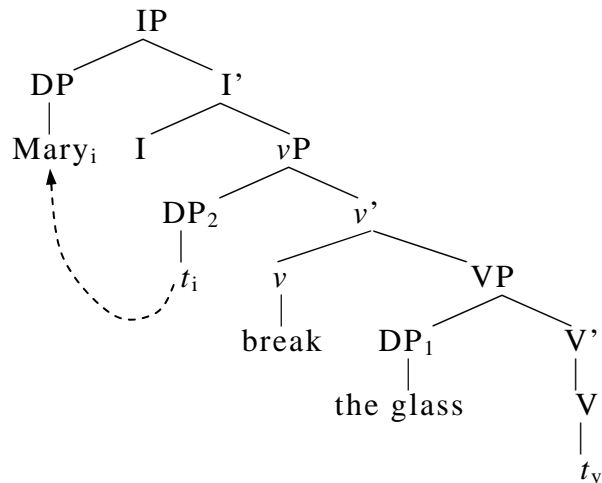
2.1 自他の対応と *little v*

(2)のような非動作主他動詞構文を考察する前に、UTAHとの関わりで、動作主他動詞文とそれと対応する自動詞文の構造について、最近の極小主義(Minimalist Program)で想定されている分析を見ておきたい。典型的な自他対応のある動詞 *break* を例にとると、他動詞(4a)と対応する非対格自動詞(4b)はそれぞれ(5a)(5b)のような構造を持つと分析されている。(Chomsky (1995)、Collins (1997)参照) ¹

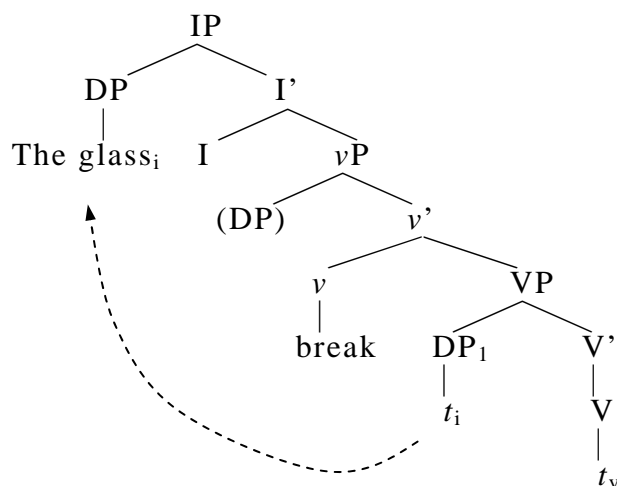
¹ ここでは英語の文の構造を示してあるが、日本語でも(主要部の位置が異なること以外は)基本的には同様である。ただ、日本語では自他の違いは、「壊す(*kowa-s-u*; *kow-as-u*)」「壊れる(*kowa-re-ru*; *kow-are-ru*)」のように

- (4) a. Mary broke the glass.
 b. The glass broke.

(5) a.



b.



これらは、いわゆる VP-shell 構造を持ち、VP は他動詞(5a)にも自動詞(5b)にも共通し、動詞 break はその主要部 V であり、break と関わる対象の項は VP の指定部に現れる。自動詞と他動詞の違いは、shell となる vP にあり、他動詞の場合は動作主が vP の指定部に現れるが、自動詞の場合その位置は空である。もう一つの違いは対象への目的格の付与（または照合）で、他動詞の v は格付与（照合）を行うが、自動詞の v は行わない。そのため、自動詞の場合、対象の句は目的格が受けられないので、IP の指定部へ移動しそこで主格を受ける。それに

形態的に表示されることが多く、それらは v の形態的具現であると考え、後で示される日本語の構造(11)(32)では、v に自他の別を示す形態素を生成する。(長谷川(1999)、西山(2000)参照)

対し、他動詞では動作主の句が IP 指定部へ移動し主格を受けるのである。

この分析では、*v*は目的格付与と外項付与に関わる機能を持ち、自他の別は統語的に説明されているが、それを可能にしているのは、厳密に解釈されたUTAHの存在である。²すなわち、上記(5)の分析には(6)および(7)が仮説としてあり、この方向性は、統語構造は概念構造を反映した項構造の写像であるとするHale and Keyser (1993)の主張に沿ったものである。

(6) UTAH は厳密に解釈され、特に、対象は VP 指定部に、動作主は *vP* の指定部に生成される。

(7) *v*には（非対格）自動詞用のものと他動詞用のものがあり、各々は次のように規定される。³

- a. 他動詞用の *v*: (i) 指定部に外項として意味役割を付与、
(ii) 目的格の付与（照合）
- b. 自動詞用の *v*: (i) 指定部には外項を持たない、
(ii) 目的格の付与（照合）はしない

(7)の仮説の下では、他動詞用の *v* が導入する外項の意味役割は、(6)により自ずと動作主ということになる。問題は、冒頭(2)の非動作主他動詞構文（(8)として採録）の主語はどこに生成されるのかということ

² 「緩い」解釈の UTAH なら、自動詞の場合は相対的位置関係を持つ他の要素がないので、主語は意味役割のタイプに拘わらず VP の指定部でも *vP* の指定部でも構わないことになり、動作主を主語に持つ run や sleep のような非能格自動詞と対象を主語とする arrive などの非対格自動詞との違いを構造的に表すことができない。このような理由からも、UTAH には厳密な解釈を適用し、後にも述べるが、対象は自他を問わず VP の指定部に、動作主も同様に自他を問わず *vP* の指定部に生成されるとするのが適当なのである。

³ *v*の役割を外項の導入と目的格付与（照合）だけに限れば、そのいずれにも関与しない非対格自動詞用の *v*はその存在自体が不要のように見えるが、*v*には構造構築の役割もあり、文構造上は VP の主要部 V を引きつける。この機能があるので、(i)のような非対格動詞を使った there 構文の動詞が、VP 指定部にあるとされる対象の句より左に現れるのである。(Collins 1997)

- (i) a. There arrived a man at the party.
- b. *There a man arrived at the party.

である。

- (8) a. 風が 枝を 揺らした。 (原因)
b. 花子が 腕を 折った。 (経験者)
c. その出来事が 大輔を 驚かせた。 (原因)

以下では、まず 2.2 で原因を主語とする(8a/c)を考察し、経験者主語の(8b)は 3.2 で扱うことにする。

2.2 非動作主主語の構造的位罫

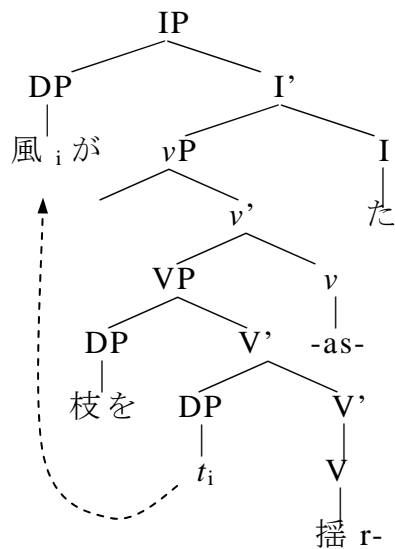
他動詞の主語は外項として、(7a-i)の示すように *v* の指定部に生成されるとすると、(8)の主語についての考え方は二通りに限られる。すなわち、(6)の仮説を緩め、*v* の指定部は動作主のみならず、原因や経験者も生起可能と考えるか、または、(6)を厳密に守り、動作主以外の主語は派生主語と考えるかである。前者なら、非動作主主語他動詞構文も基本的には動作主主語他動詞構文と同様の構造と派生 (e.g.(5a)) を持つことになり、後者なら、非動作主の意味役割を持つ要素がどこから派生してきたかを考察する必要がある。この選択にあたって、(8a)や(8c)に対しては原因の項を含んだ(9a)(9b)のような自動詞文が存在するが、(1)に対応する動作主を含む自動詞文(10)が非文法的であるという事実は示唆的である。

- (9) a. 枝が 風で 揺れた。
b. 大輔が その出来事に 驚いた。
- (10) a. *枝が {子どもで／子どもによって} 揺れた。
b. *枝が {花子で／花子によって} 折れた。
c. *大輔が {朋子で／朋子に} 驚いた。

他動詞文(8a)では原因の句「風」は主語で、対象の「枝」は目的語であるが、自動詞文(9a)では対象が主語で原因は付加詞である。心理述語の(8c)と(9b)にも同様の逆転が見られる。こうした原因の句の振る舞いに対し、(10)で明らかのように、動作主の句は非対格自動詞文では決して現れることがない。この動作主と非動作主の非対格自動詞文での生起可能性の違いは、UTAH の観点からは次のように考えるこ

とができるだろう。まず、(6)の仮説に問題はなく、対象は VP の指定部、動作主は vP の指定部に生成される。そして、原因の句に関しては(9)をその基本と考え VP 内に起こるとする。これにより、(10)の非文法性は、動作主が VP 内に起こることが不可能なことから説明がつく。そして、問題となる非動作主（原因）主語を持つ他動詞文(8a/c)だが、原因の句は自動詞の(9)同様 VP 内に生成されるのであるから、それが主語となるためには、VP 内から IP の指定部へ移動し、対象の句は、動作主他動詞文と同様目的格を受けるのである。すなわち、(8a/c)と(9)は対象と原因という同じ要素を VP 内に持つのであるが、自動詞(9)の v は上記(5b)の非対格動詞同様、目的格を与えないので、対象の句が IP の指定部に移動して主格を受ける。原因の句はそのまま付加詞として VP 内に止まる。一方、(8a/c)の v は、日本語の場合その形態からも明らかであるが他動詞であり、対象の句に目的格を付与する。結果として IP の指定部には原因の句が移動し主格を受けるのである。自動詞の場合の派生は基本的には(5b)と同様なので繰り返さないが、他動詞(8a)の派生を(11)に示す。

(11)



この派生が、動作主他動詞文 (e.g.(5a)) と決定的に異なるのは、v がその指定部に外項を持たないという点である。すなわちこの v は、自動詞用の v の性質(7b-i)を持つが、目的格を付与するという点では他動詞用の v と同様の性質(7a-ii)を示すのである。つまり、(11)の構造と派生を可能にするためには、(7)で示された他動詞用か自動詞用かという二分法の v の特徴付けでは不十分なのである。むしろ、v を特

徴づける(i)外項（動作主）を取るか否か、(ii)目的格を与えるか否か、の二つの性質が自由に組み合わさって異なる述語のタイプができるとする方向性が示唆される。すなわち、*v*というのは本来、(7)で示す二つのタイプだけではなく、(12)に示すような四つのタイプの可能性があり、(11)で分析される非動作主主語他動詞文は(12b)の *v* (i.e.外項を持たないが目的格付与を行うという特性を持つ *v*) が関わる構文として分析するとの提案である。

(12)

	+ 外項	- 外項
+目的格	(a) 動作主他動詞	(b) 非動作主他動詞
- 目的格	(c) (3.1 参照)	(d) 非対格自動詞

(7)では、*v*は外項を持ち目的格を与える(7a)のタイプ((12a)に相当)かそのどちらの機能も持たない(7b)のタイプ((12d)に相当)しか許さなれないが、そもそも、 θ 理論の関わる外項の有無(7-i)と格理論に属する格付与の有無(7-ii)という本来異なる理論に属する事柄が、常に同じ値を持つように指定されていること自体に理論的な不自然さがあるのである。元々、*v*というカテゴリーは、項を許すという点では語彙範疇の、格付与（およびVの引きつけ）という点では機能範疇的の性質を持つとされているが、(12)にはまさに、その*v*の二面的な特徴が明確に表されている。その観点からだけでも、(12)の提案は、非動作主構文の分析とは独立して、理論的に追求するのに十分価値のあるものであると考える。

以下、第3節では、先ず、3.1で(c)にあたる動詞のタイプが存在することを示し、次に、3.2で、ここでの(12b)のタイプの*v*を想定した非動作主主語他動詞文の分析を応用することで、経験者が主語となる他動詞文も無理なく分析できることを示す。第4節では、述語を(7)のように二分する考え方の基盤となったブルツィオの一般化を(12)の観点から考察し、(12b)のタイプの*v*は一見ブルツィオの一般化と真っ向から対立するように見えるが、実はブルツィオの一般化は目的語とは異なる主語の有無に関する現象的・記述的一般化に過ぎず、理論的には(12)と相対立するものではなく、むしろ(12)はブルツィオの一般化が記述的有効性を持つという事実を原理的に説明する手段を提供する

ものであることを論ずる。

3. 提案(12)の裏付け

3.1 動作主主語を持つ非対格自動詞の存在

(12)で示した v の特徴付けが正しいとすると、(11)の分析での[-外項][+目的格]という(12b)の v の他に、これまでの v のあり方 (i.e.(7)) では予測されない(12c)の[+外項][-目的格]という素性の組み合わせを持つ v (i.e.動作主主語を持つ自動詞) の存在を予測する。それは一見、走る(run)や笑う(laugh)のようないわゆる非能格自動詞を指すと思えるが、非能格自動詞は、同族目的語や移動の範囲を示す目的語を許すという点で、[+外項][+目的格]の v 、すなわち(7a)なり(12a)なりに相当する v であって(12c)にあたるものではないことが分かる。(Levin (1993)、影山 (1996)など参照)

(13) a. 花子が (校庭を) 走った。

b. 友子が (歌を) 歌った。

(14) a. Mary ran (a track).

b. Sue laughed (a fanny laugh).

(12c)の v とは、目的格を与えないという点で非対格的であるが、同時に、動作主を主語に取る自動詞用の v のことである。それは、他動詞と対応のある非対格自動詞が動作主を持つような文ということであり、(15)(16)がそれに相当する。

(15) a. 花子が (わざと) 動いた

b. 京子が (故意に) 倒れた。

(16) a. Mary (intentionally) moved.

b. Susan tried to stand straight.

(15)(16)の「動く(move)」や「倒れる」、「立つ(stand)」は、動作主を修飾する「わざと」のような副詞を許したり、動作主を補部の主語に要求する try の補部に起こることからその主語の意味役割は動作主と認定できる。そして同時に、これらの動詞は(17)(18)からも分かるように、

他動詞と対応し対象を主語に取る純粋な形での非対格自動詞ともなることから、基本的には非対格自動詞であると考えられる。英語の場合は自他が同形なので、一見しただけでは(16)が自動詞なのか他動詞なのか分かりにくい、日本語の(15)の動詞は形態的に明らかに(17a/b)の非対格自動詞と同形であり、(17a'/b')の他動詞の形態ではない。

- (17) a. 机が 動いた。 a'.. 順子が 机を 動かした。
 b. イスが 倒れた。 b'. 友子が イスを 倒した。

- (18) a. The desk moved. a'. John moved the desk.
 b. The bottle stood on the bar. b'. Jane stood the bottle on the bar.

さらに、(15)(16)は、(19)(20)から分かるように、動作主を持つとはいえ、目的格を与えることはできず、その点では明らかに(13)(14)のような非能格自動詞ではない。このことから、(15)(16)の動詞は、(12c)の[+外項][-目的格]に相当する *v* を持つ動詞と考えて差し支えがないと思われる。⁴

- (19) a. 花子が (*校庭を/*動きを) 動いた。
 b. 京子が (*地面を/*身体を) 倒れた。

- (20) a. Mary moved (*a little move / *the track).
 b. Susan stood (*a straight stand / *the ground).

(7)のような従来の動詞のクラス分けでは、このような動作主を持つ非対格自動詞は、非動作主を持つ他動詞同様、体系的に捉えることが難しい(それ故ほとんど扱われて来なかった)現象だったのであるが、(12)のように考えれば、むしろ、それらの存在は予測され、かつ無理

⁴ 影山(2001)は、非対格自動詞でも、主語に動作主を取り意図的な動作としての読みを無理にでも与えると目的格付与が可能になるとの Tenny (1995) の観察を紹介している。

(i) Laura deliberately {glided/moved/rolled/slid/swung} the course.
(Tenny 1995: 219)

この判断が正しいとすると、非対格自動詞でも非能格自動詞の *v* ([+外項][+目的格]) と共起できると考える必要があるかもしれない。

なく説明がつくのである。⁵

3.2 経験者主語他動詞文

第2節で、非動作主他動詞文というのは *v* が (12b) の素性 ([-外項][+目的格]) を持つ時に可能となると論じた。そこで扱った文 (8a/c) は、表層的には主語と目的語を持つ他動詞文であったが、(11) の構造と派生が示すように、その主語は VP 内部の原因の句が IP の位置へ移動し主格を受けた結果得られたものである。この分析が正しいとすると、英語のような主語に虚辞の *it* を許す言語では、[-外項][+目的格] の素性を持つ *v* は、それそのものが明示された構文—主語が虚辞の *it* で目的語 (対象) が存在する構文—の存在を予測する。そして、実際そのような文は存在するのである。

- (21) a. It surprised everyone that John left so early.
b. It made me happy that Mary showed up.
c. It behooves public officials to do their duty.

(21a)(21b) の *that* 節や (21c) の不定詞の意味役割はさておき、これらの文で主語が虚辞の *it* であることは、*v* の素性が [-外項] であることを示している。また、これらの文に目的語が存在するということは、この *v* が [+目的語] の素性を持っていることを示している。⁶ すなわち、(21) は全て (12b) の素性を持つ *v* を含む文なのである。

⁵ 上記の脚注 4 とも関わるが、(7) のような二分法では、他動詞と対応のある (日本語の場合には形態的に明示された) 非対格自動詞が動作主主語を持つ場合には、非能格自動詞として分類されることになり、その場合、なぜ非対格自動詞と同形の非能格自動詞には目的語が生起できないのか (i.e. (13)(14) と (19)(20) の文法性の違い) についての根本的説明は与えられない。

⁶ (21a) と (21b) では、虚辞の *it* を使わずに文末の *that* 節を文頭に移動することができ、殊に (21a) の心理述語の場合は *that* 節は *surprise* と関わる要素であるので、これらの文に関わる *v* は外項 (*that* 節) を取ると考えることも不可能ではない。しかし、(21b) の *that* 節は *happy* の補部であり、*make* と関わる項でない。さらに、(21c) の *behoove* のような述語は主語には虚辞しか許さずかつ目的語を取ることから、このような動詞を分析するためにはいずれにしても (12c) のような *v* の素性の組み合わせが必要なのである。*behoove* のような述語の存在については Joseph Emonds 氏から指摘を受けた。

さらに、*v*の素性が(12b)のように[-外項]の場合は外項を持たないわけであるから、IPの指定部には(21)のような虚辞だけでなく、主格を受けるために移動してくる要素も現れることができる。そのような移動してきた派生主語の意味役割は、(8a/c)では原因であったが、それだけに限定される必要はない筈である。つまり、非動作主主語構文には、原因以外の要素が主格の付与を必要とするなら、そうした要素も主語として現れても一向に差し支えないはずである。冒頭で提示した知覚表現の(2b) (= (8b)、(22a)として採録) はそうした例と思われる。

- (22) a. 花子が 腕を 折った。 (= (2b)) a'. 花子の腕が 折れた。
 b. 朋子が 腰を 痛めた。 b'. 朋子の腰が 痛む (らしい)。

(22a/b)では主語は経験者と思われるが、対応する非対格自動詞の(22a'/b')から明らかのように、それらは身体部位の不可分所有者である。第2節で示した非動作主主語他動詞構文の分析を応用すれば、(22a/b)の主語は、身体部位である対象の項の所有者の位置から分離してIPの指定部へ移動してきたとの分析が考えられる。そして、そうした分析が基本的に正しいことを示す証拠が存在する。⁷

先ず、同じ不可分所有者であっても経験者主語の(23)と動作主主語の(24)では、所有物である目的語に主語と照応する代名詞表現を取ることができるか否かで明確な違いがある。

- (23) a. 花子_iが { *彼女_iの / *自分_iの / ϕ_i } 腕を 折った。
 b. 朋子_iが { *彼女_iの / *自分_iの / ϕ_i } 腰を 痛めた。

- (24) a. 花子_iが { 彼女_iの / 自分_iの / ϕ_i } 顔を 洗った。
 b. 朋子_iが { 彼女_iの / 自分_iの / ϕ_i } 考えを 話した。

経験者主語は、それに照応する代名詞を目的語の所有格として明示することができない。この制約は、(25)の多重主語構文にも同様にあてはまる。

- (25) a. 花子_iが { *彼女_iの / *自分_iの / ϕ_i } 頭が 痛い (らしい)。
 b. 朋子_iが { *彼女_iの / *自分_iの / ϕ_i } 足が 長い。

⁷ (22)に対応する Mary hurt her back のような英語の知覚表現の分析につ

(25)では、述語は形容詞で、明らかに一項述語であり、その論理的主語は文頭の「花子」や「朋子」ではなく、身体部位の「頭」や「足」の方である。ここでの非文法性は、文頭のカ格名詞句が2番目のカ格名詞句（論理的主語）の所有格位置から分離して移動（いわゆる所有者上昇 *possessor ascension*）し、移動元の所有格の位置は、痕跡によって占められており、その痕跡には音形が伴わないことから説明が付けられる。もし、(22a/b)の主語も上記で示唆したように目的語の所有者の位置から移動したと考えれば、(23)に見られる非文法性も(25)と同様に説明ができるのである。一方、動作主主語の(24)では、*v*の指定部に目的語とは独立して生成されるため、目的語の所有格の位置にそれに照応する代名詞表現が起こることには何ら問題がない。

この所有者上昇による(23)と(25)の分析は、(26)に見られる文法性の説明にも有効である。

(26) a. ?*腰を 朋子が 痛めた。

b. * 頭が 花子が 痛い。

c. 顔を 花子が 洗った。

これらはそれぞれ(23b)(25a)(24a)に対応し、身体部位を示す要素をかき混ぜ(*Scrambling*)により文頭へ移動させた文である。ここで注目したいのは、上記で所有格上昇が関わると分析された(23b)(25a)と対応する(26a)(26b)の文法性が、動作主主語構文(24a)と対応する(26c)よりかなり低いという事実である。この文法性の違いは、*Scrambling*された身体部位を表す要素に所有者上昇により残された痕跡があるか否かによると考えられる。すなわち、(26a)(26b)では、所有者上昇の痕跡が「腰」や「頭」の所有格の位置に残っており、それが先行詞である「朋子」や「花子」により適正統率されていないので文法性が落ちるのである。このように、(12)の提案に従えば、(22a/b)に見られる経験者を主語に取る知覚他動詞構文も、(8a/b)の原因を主語に取る非動作主主語構文同様、(12b)の[-外項][+目的格]の素性を持つ *v*による構文として無理なく分析できるのである。

さらに、日本語に見られる(27)のタイプの心理表現の現象 (cf. Hatori

いては Cambell and Martin (1989)がある。

(1997)) は、以下で詳しく見ていくが、上記の非動作主主語構文の分析をさらに支持するものである。上記で、非動作主主語には、経験者主語の知覚他動詞構文の派生と第2節で扱った原因を主語にとる他動詞文構文の派生の両方が可能であることを見てきたが、自動詞の(27c)に対し、他動詞構文に(27a)(27b)の二つが存在するという事実は、構造的条件さえ合えば、原因でも経験者でも主語になれることを示しており、非動作主主語他動詞文の主語が VP 内から移動によって導かれるとする本論文の主張を経験的に裏付ける格好の証拠となるのである。

- (27) a. その一言が 京子の気持ちを なごませた。
b. 京子が その一言に 気持ちを なごませた。
c. 京子の気持ちが その一言に なごんだ。

このタイプの心理表現の特徴は、(27c)の自動詞に対応して、原因の主語を取る(27a)と経験者を主語とする(27b)の二つの他動詞文を持つことにあるが、*v*の素性が[-外項][+目的格]である場合、IPの指定部である主語位置にはVP内部からの要素が移動すると考える本分析では、当然予測される現象なのである。⁸すなわち、(27a/b)は、原因を主語に取る他動詞心理述語(8c)(9b)（各々(28a)(28b)として採録）と対象の所有者である経験者を主語に取る知覚他動詞(22)の両方の特徴を持つために、結果として他動詞構文には二つの派生が観察されるのである。

- (28) a. その出来事が 太郎を 驚かせた。
b. 太郎が その出来事に 驚いた。

先ず心理述語(28)との共通点だが、(27)は、(28)同様意味的に心理状態を表すことだけでなく、他動詞の(27a)では(28a)同様原因が主語となっており、その原因の句は対応する自動詞文(27c)(28b)の付加詞と同一である。このことは、原因主語の他動詞文(27a)は(28a)と、非対格自動詞文(27c)は(28b)と、同様の派生を持つことを示している。すなわち、原因の句はVPの付加詞として生成され、*v*が非対格自動詞用の(12d) [-

⁸ (27a)(27b)の他に、他の自他の対応の場合と同様、動作主を主語に取る他動詞文(i)も当然存在するが、それは *v*の素性が[+外項]を持つ(12a)の場合であり、(27a)(27)の[-外項]素性を持つ *v*とは異なる。

(i) 太郎が (面白いことを言って) 京子の気持ちを 和ませた。

外項][-目的格]) の場合は、対象の句(「京子の気持ち」(27c)と「太郎」(28b)) が主語になり、*v*が(12b) ([-外項][+目的格]) の場合は、対象の句は目的格を受け、原因の句がIPの指定部へ移動し主語となり非動作主他動詞構文を派生させるのである。ちなみに、原因が主語となる他動詞文には、(29)に示されているように、共に照応詞の逆行束縛現象が観察される。この現象は、原因の句がVP内部から移動するという本分析なら、照応詞は派生のいずれかのレベルで先行詞に束縛していれば許されるとする Belletti and Rizzi (1988)の提案をそのまま採用して説明することができる。⁹

- (29) a. 自分_iについての噂が 花子_iを 悲しませた。
b. 自分_iの過去が 太郎_iを 苦しめている。

- (30) a. 自分_iについての噂が 花子_iの気持ちを 沈ませた。
b. 自分_iの将来の展望が 太郎_iの心を 弾ませた。

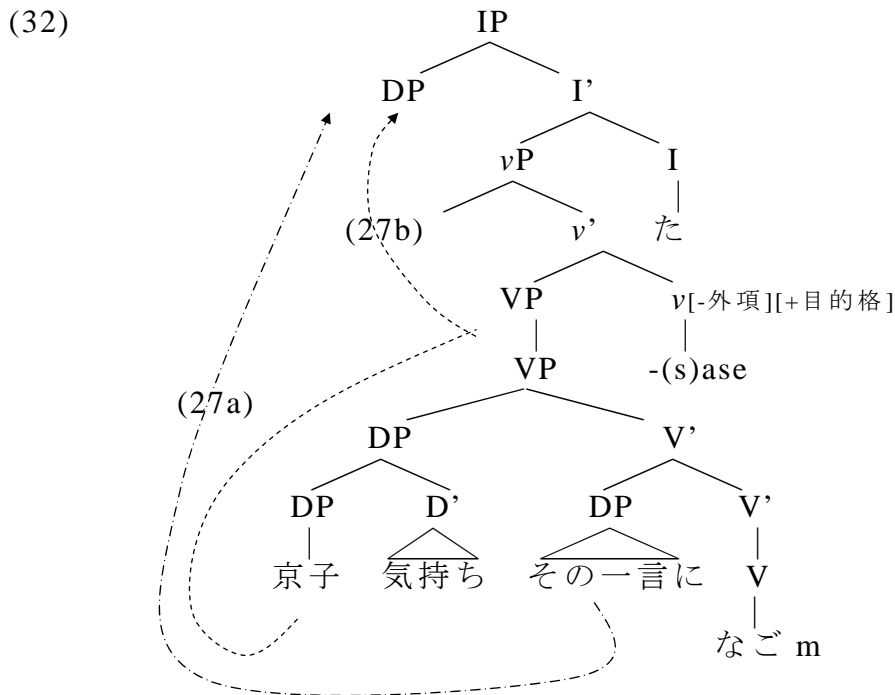
次に、知覚表現(22)との類似性だが、それは、他動詞の(27b)の主語が、対応する非対格自動詞(27c)における対象(心理状態)の所有者となっている点に見られる。これは(22a/b)と(22a'/b')の関係と同様である。すなわち、(27b)は対象(目的語)内の所有者が目的語から分離しIPの指定部に移動した結果派生されたと分析できるのである。実際、(22)に対応する(23)で見られた文法性の対比は、(27b)に対応する(31)でも観察できる。

- (31) 京子_iが その一言に {*彼女_iの / *自分_iの / ϕ _i} 気持ちを なごませた。

つまり、主語である「京子」は目的語の「気持ち」の所有格の位置から移動したために、その痕跡の位置には主語と照応する代名詞表現が

⁹ 厳密に言えば、(30)のままでは、例え照応詞「自分」を含む原因の句がVP内の付加詞として生成されても、VP指定部の対象の所有者である「花子」や「太郎」にはC-統御されない。この問題を解決するには、対象の所有者の句は、(27b)のように統語的に移動する場合だけでなく、統語で移動することのない(27b)においてもLFで対象から分離し、原因の句の痕跡(またはそのコピー)を束縛する位置((32)で示したVP付加の位置)へ移動すると考える必要がある。

許されないのである。上記のまとめとして、非動作主他動詞文である(27a)と(27b)の構造と派生を(32)に示す。¹⁰



(27)のような心理表現に異なる意味役割（原因と経験者）を持つ主語を取る二つの非動作主他動詞構文が存在するという事実は、非動作主の主語が *v* の外項として直接認可されるのではなく、VP 内の要素が IP の指定部へ移動してくるとする本分析なら、原因を主語に取る心理述語や経験者が主語となる知覚表現が存在する限りにおいて予測できることである。その意味においても、(12)の提案は、*v* の素性の整合性という理論上の利点だけでなく、記述的にも望ましい結果を導き出していると言える。

4. ブルツィオの一般化の位置付け

そもそも *v* を(7)のような二分法で分類した背景には、ブルツィオの一般化(33)は言語に有効であると信じられてきたからである。

(33)ブルツィオの一般化

¹⁰ (32)で示した(27b)の分析では、目的語から所有者移動により分離した要素は、VP へ付加した後に IP の指定部へ移動すると仮定した。これは、所有者移動一般の分析を踏襲したことによるが、本論の分析とは直接関わらない。(長谷川(1999)参照)

動詞は外項を与える時、かつその時にのみ目的格を与える。

すなわち、目的格を与えることのできる動詞は常に外項を与える必要があり、(12)の観点からは、(12a)は許すか(12b)のような外項を与えないのに目的格を与える動詞は存在しないことになる。しかし、このことは(12b)を基盤とした非動作主主語他動詞構文の本分析とブルツィオの一般化が相容れない関係にあることを意味するものではない。注意しておきたいのは、ブルツィオの一般化は、表層的言語事実についての一般化であり、(33)での「外項を与える時」というのは、現象的には「目的語とは別に語彙的主語が存在する」状況を指しているに過ぎない。その意味では、上記で扱った非動作主主語構文は、目的語とは別に主語が現れる構文に違いはないわけであるから、現象としては(33)の違反とはならない。言い換えれば、ブルツィオの一般化は動作主も非動作主も共に主語と目的語を持つという他動詞の性質を示す限りにおいて現象的・記述的一般化として有効なのである。しかし、だからと言って、(12)の提案と(33)が常に同じ予測をするわけではない。前節で観察したように、(12b)は[-外項][+目的格]の素性を持つわけであるから、虚辞の *it* を主語に取りかつ目的語を持つ(21)にも適用できるが、(33)では(21)の存在は説明できず、決定的な反例として処理せざるを得ない。逆に言えば、ブルツィオの一般化は、非動作主主語構文を動作主主語構文と同様に扱うが故に言語に広く有効とみなされてきたのであり、その有効性故に、(21)のような文は例外としてほとんどその存在を無視してきたのである。つまり、ブルツィオの一般化というのは、主語と目的語に関する（(21)を除いた）現象を捉えてはいるが、それはあくまでも現象の一般化に止まり、言語の体系に関わる理論的一般化ではないのである。言語の項構造および文構造に関する重要な一般化は、むしろ(12)の提案にこそ見て取れ、(12)ならば、(33)では想定されない「外項を持たないが目的格を与える」*v* の存在が予想され、*v* の機能を明らかにすることで、逆にブルツィオの一般化が記述的一般化として有効であると考えられてきたことに対する説明ができるのである。さらに、(12)ならば、上記で論じてきたように、ブルツィオの一般化では見過ごされてきた、非動作主他動詞構文と動作主他動詞構文の体系的な相違点を、それぞれ[-外項]と[+外項]という *v* の

素性から明らかにできるのである。

本論文では、これまでそれ程体系的に分析されてこなかった非動作主主語構文の分析に中心に論じてきたが、そうした構文に焦点をあて(12)を提案することにより、ブルツィオの一般化の陰に隠れて見えてこなかった述語の項と格および文構造の真の関係を、理論的にも記述的にもより整合性があり説明力のある形で浮き彫りにすることが可能となったのである。

引用文献

- Baker, Mark (1993) *Incorporation: A Theory of Grammatical Function Change*. University of Chicago Press.
- Belletti, Adriana and Luigi Rizzi (1988) "Psych-verbs and θ -theory," *Natural Language and Linguistic Theory* 6: 291-352.
- Cambell, Richard and Jack Martin (1989) "Sensation Predicates and the Syntax of Stativity," *WCCFL* 8, 44-55.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. MIT Press.
- Collins, Chris (1997) *Local Economy*. MIT Press.
- Hale, Kenneth and Jay Keyser (1993) "On Argument Structure and the Lexical Expression of Syntactic Relations," in K. Hale and J. Keyser (eds.) *A View from Building 20, A Festschrift for Sylvain Bromberger*. MIT press.
- 長谷川信子 (1999) 『生成日本語学入門』大修館書店.
- Hatori, Yuriko (1997) "On the Lexical Conceptual Structure of Psych-Verbs," in Taro Kageyama (ed.) *Verb Semantics and Syntactic Structure*. 15-44. Tokyo: Kurosio Publishers.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論：言語と認知の接点』くろしお出版.
- 影山太郎 (編) (2001) 『日英対照動詞の意味と構文』大修館書店.
- Levin, Beth (1993) *English Verb Classes and Alternations*. Chicago: University of Chicago Press.
- 西山國雄 (2000) 「自他交替と形態論」丸田忠雄、須賀一好 (編) 『日英語の自他の交替』145-165. ひつじ書房.
- Tenny, Carol (1995) "Modularity in Thematic versus Aspectual Licensing: Paths and Moved Objects in Motion Verbs," *Canadian Journal of*

Linguistics 40: 201-234.

261-0014 千葉市美浜区若葉 1-4-1
神田外語大学 言語科学研究科
hasegawa@kanda.kuis.ac.jp